

被災地の「今」残したい

映画監督体験会がスタート

大船渡



大学院生らとともに住民の視点で映像製作。日頃市町

映像制作 住民の視点で

東日本大震災から立ち上がる気仙の「今」を地域住民の視点で映像に残そうと、映画監督体験会が2日から始まった。初日は機器操作の基礎を学びながら、2日目を以降に撮影する構想を議論。参加した地域住民は、映像づくりを通して改めて被災経験を振り返り、後世に残すべき風景や教訓を探った。

体験会は震災以降、気仙両市で支援活動を展開している防災科学技術研究所と、NTTドコモ・モバイル社会研究所が主催。3日間の日程でシナリオ作りから撮影、編集、公開までを体験し、映像制作や機器操作を学んでもらおうと企画した。この日は、気仙に住むシニア世代の中高校生10人が参加。2人ずつ5グループに分かれ、東京工業大学の大学院生らがサポート役を担

校では、端末機器の操作方法を確認した後、グループごとに構想を披露した。震災後の地域医療問題や住居確保など課題を掘り下げ、内容をだてなく、「今残っている地域の素晴らしさを伝えたい」と、植物や名産品、由緒ある駅・鉄道施設にスポットライトを当て、アイデアなどが披露された。

中学校周辺で実際に映像収録を体験しながら、グループごとに交流を深めた。同大学院情報理工学研究所の岸田知子さん(24)は「構想をまとめる中で、これまで過ぎてきた地域住民ならではの課題や困り事を確認できました。地域住民の視点で撮影する映像を残すことは、価値のあることだと思えます」と話していた。また、過去の作品は肖像権などの問題が解決できれば、インターネット上での公開も行い、広く将来にわたって映

像を共有できる形を描く。体験会の指導役を務めた同研究所の岡田真也さんは「映像づくりを通して被災の記憶を整理し、自分自身が心の中にある思いを理し直す機会も生まれるのでは」と語る。3日から構想に基づき撮影が本格化し、4日にはグループごとの「上映会」も計画。9日(火)以降の3日間は「3分間の短編映画を作ってみませんか」として、市内在住の中学生を対象に開催する。申し込み、問い合わせは体験会に協力する、PO法人・夢ネット大船渡の西村幸雄さん(TEL090・707・8・5100)へ。

市社協に義援金と米

金ヶ崎町の団体が贈る

大船渡

金ヶ崎町民生委員児童委員OB会(加藤久会長、会員21人)は2日、大船渡市社会福祉協議会(佐藤秀一会長)にひとめぼれ170キと義援金16万2000円を贈った。同会は、民生委員などの経験を生かして、さまざまな貢献活動を行っており、今回の震災で苦勞している大船渡市の被災者を支援しようと同協議会に米などを託した。義援金は

与日家の才呆獲

同館の主任専門学芸員のおつしやっていた。今こそ、気仙に残る大工

りの再興誓う
大船渡の2保存会
角の寄贈を受けて

